

は足立区教委から学力向上策の一環として「あだちコアスクール」の指定も受けていますから、当校の研究成果を区全体に広げると共に、他の実践校と連携を深め、将来は全国にネットワークを広げていきたいと構想しています。

また今後は大学などと更に連携を進めると共に、民間企業などとも新しい関係を築いていきたいと思います。民間企業は常に最先端の研究成果を持っており、今や「公」の研究機

関より進んでいる分野も多いわけです。近年では公立の教育研究所の先端研究が減退しているのではと懸念しています。それを民間が補うこともできると期待しています。

子どもたちを教育育てるとするのは国の将来を左右する仕事です。そのためには「産」「学」「公」などの垣根をできるだけ低くして共に教育課題を受け止め、研究者や研究機関には是非、教育の現場を支援していただきたいと願います。

玉置 崇 先生

愛知県小牧市立光ヶ丘中学校校長

「『現場主義』の研究者がもっともっと増えて欲しい。大学構内から我が校に降りてきてください。大歓迎です」

Q 玉置先生は早い段階からITを教育に取り入れてられました。導入に当たり、どのような方法を取られたのでしょうか？

私が取り組み始めたころは、まだWindowsというOSすらない時代です。どうやったらコンピュータを使って授業ができるかということすら見当もつかず、まずは、ソフトやプログラムを自ら考えなくてはなりません。

ソフトの一つが「数学発見型ソフトウェア」と呼んでいるタイプです。例えば「星を揃えよう」というソフト。画面に数字を入力すると★が出てくる。ただしコンピュータの反応は2種類。「無反応」と「★」だけです。そして例えば1と入れると何も返ってこない、2を入れると星が返ってくるようになっています。子どもたちはいろいろな数を入れてみる。1では反応がないが、2だと★が出る。そこで「偶数を入れると返ってくるかも知れない」と思う子は偶数を入力すると★が出る。ある子どもは8とか12を入れてみるかも知れない、そうすると★が出てくるんです。しかし21と入れても星は出てこない。このソフトでは、偶数を入れると★が出るようにプログラミングされているわけです。このようにコンピュータに働きかけ、返ってくる情報を元にしながらいろいろなことをやってみて、数の性質ということ子どもたちが自分自身で考える。これは単にコンピュータを使えばいいというのではなく、生徒が自由に入力し、そこで得る様々な情報

から「答え」を発見できる力を身に付けられる、生徒たちとコンピュータの双方向性を作り出すという試みです。このようなソフトをかなりつくりました。

Q 現在では学校経営者の立場で教育現場に立たれているわけですが、どのようにITを利用しながら学校運営をされているのでしょうか？

生徒たちには、「学ぶことが面白い」、そして「学び続けることが人間の大切な営みである」ということを学校生活の中で知ってほしいと思っています。学び続けるということは、生徒たちだけでなく、学校が教師や保護者にも求めるものです。光ヶ丘中学ではホームページを積極的に活用していますが、これは、ITを導入しながら学校を運営するための一環です。教師、生徒、保護者、地域、それぞれが積極的に関わってくれることを目的としています。

「学校ではこんなことを考えています」「〇〇先生はこういう授業をしています」「〇年〇組の生徒たちは、こんな学習をしました」「お父さんやお母さんも一緒になって考えてください」と、常に学校から新しい情報を発信する。一方的な情報発信ではなく、生徒や保護者の皆さんにも積極的にホームページを活用してもらうことによって、お互いの理解が生まれて協力し合うことができるのです。

またこのホームページは、地域の情報発信やコミュニティとして活用してもらうことで、学校関係者以外の人たちにも利用していただいています。できるだけ多くの方に学校で起きていることを知ってもらうことによって、「見られてい



たまおき たかし

●
愛知県小牧市立光ヶ丘中学校校長。
早期からITを利用した授業や学校運営に
取り組んでおり、ホームページを毎日更新し、
生徒や親、地域に向けて情報を発信している。
著書に『数学の授業を感動の連続に』
『コンピュータで数学授業を変えよう』
(いずれも共著、明治図書)他多数。

る」という意識が、教師の成長を促してくれるのです。成長するということは、学び続けるということ。ホームページの活用によって、教師の学びの姿勢を生徒たちに見せることにもつながると考えています。

Q 専門研究者や教育研究機関から出される
論文や研究報告を読まれて、
どんなことを実感されていますか？

私は、教育大学の附属校にいたために、大学の研究者たちと情報交換をしながら教育実践するという経験ができました。

た。それは、私の教師としてのキャリアにとって大きな経験でした。しかし多くの教師たちは、そうした経験を積むことができません。また、論文や研究報告の中には、研究対象をどこに向けているのか疑問に思うことがあります。ですから教育現場にいる教師たちは、研究機関の論文を読む機会があっても「じゃあ具体的にどうすればいいの？」となってしまう。一体誰に読んでもらうつもりで研究をしているのだろうかと感じることがあります。

教師に読まれることを前提としていない論文は、教育現場では役に立ちません。研究者から出される理論を具体的に実践していくのは教師の仕事ですが、あまりにも抽象的な論文では、せっかくの理論も空論となってしまう。研究者同士で評価が高い学術理論があっても、それを実践し教育現場に変化が起きてこなければ意味がないのです。

大学の先生の中には、授業はとても分かりやすく面白く、研究論文を読むと難しい言葉ばかりが並んでいて全く面白くないという方もいます。授業のように分かりやすい論文がたくさんあれば、もっと教育現場に浸透していくはずですが。

附属小学校の教諭から愛知教育大学の教授になられた志水廣先生は、授業運営についての研究をされています。非常に面白い授業をする先生で、教師の中に志水先生に教を請う人も多く、私もスタッフとして参加している「志水塾」という勉強会は、既に全国規模に展開しています。その志水先生も、以前は難しい言葉を並べたような論文をお書きになっていました。しかし、「志水塾」などを通して教師たちと交流することで、現在では、『「〇つけ法」で授業が変わる・子どもが変わる』(明治図書)など、現場にいる教師にとって分かりやすい文章を書かれておられます。

Q 教育の現場から、研究者や専門研究機関に
求めるものは何でしょうか？

研究者や研究機関と教育現場が双方向性を保つことによって、研究理論をより実践的にでき、また現場の教師に理解されていくのだと思います。教育全般が抱えている課題を、研究者と教育現場で共有し合うということですね。

具体的で実践的な研究をしていただくためにも、研究者には積極的に教育現場に足を運んでいただきたい。最近、学校側の働きかけもあり大学の先生方が教育現場に来られる機

会も増えてきましたが、「現場主義の研究者」がもっともっと増えてくれることを望んでいます。教育に関する課題は、まさに教育現場にあり、研究者が大学の構内から教育現場に降

りてくれるならば、きっと山ほどのテーマを発見できますよ。もちろん、我が校に来ていただけるのなら、大歓迎です。

池田 修 先生

東京都杉並区立和田中学校教諭

「担任にならない先生はほとんどいないのに

「担任学」はない。なぜなんだろう？

研究を実践するための

具体的な提案として、教材を示してほしい」

Q 池田先生は非常に活発な教育研究活動を
されていますが、きっかけになった
出来事などはありますか？

実は私自身は、個人的に何かに興味を持って研究を始めたとか、是非とも研究していきたいといった意識はあまり持っていなかった。ところが、なぜか課題だけは天から降ってくるんです。一つひとつ対応しているうちに結果的に身に付けることになったというのが、何を隠そう事実です。

授業にディベートを持ち込んだのも、たまたまある授業で討論させたときに、結果としてディベートのような討論となり、その時の子どもたちの反応がすごく良かったと感じたことがきっかけでした。そこでディベートについて調べているうちに、「全国教室ディベート連盟」（二杉孝司理事長。http://nade.jp/）の常任理事として指導者の立場になってしまった。

「何をしたい」というよりも、教育現場で動きながら考えてきたことが、結果的に研究という形に結びついているのだと思います。「中等教育におけるディベートの研究」という修士論文をまとめたり、様々な研究会に顔を出しているのも、私が現場で必要としているからです。

Q では、今、「動きながら考えている」という
教育課題があれば教えてください

がら生徒たちには人気がある。国語担当としては残念ですので、国語を子どもたちが実技として実感できる教科にできないかと思っています。

実技教科、例えば体育の授業を分析すると、教師が指導や説明をしているのは授業全体の2割程度で、残りの時間は全体を見渡し、適度にアドバイスをしながら授業の舵取りをしている。一方、国語の授業という、教師が黒板に漢字を書いたり、生徒と一緒に教科書を読んだり、生徒と教師が同じことをしている時間が長いことに気が付きました。つまり、時間配分の問題なんです。

そこで導入したのが、「学習ゲーム」と「ワークシート」です。例えば、百人一首を学習ゲームとして利用してみました。ディベートもゲームとして利用できます。

中学生の英語の教科書には、英語での手紙の書き方が載っています。しかし、日本語の手紙の書き方を教えている国語の授業が、一体どれほどあるのでしょうか。「Dear」で始まり「Yours」で終わることは教えるのに、「拝啓」で始まり「敬具」で終わることは教えない。中学を卒業すれば就職する子どももいるし、高校に入ってアルバイトをする子どももいますが、義務教育では履歴書の書き方を教えない。それはおかしいと思うんです。「社会に出て役立つ国語」として捉えれば、「履歴書」の書き方を学ばせることもワークシートの活用といえます。ただ、普通の履歴書を書き起こすだけでは興味も引かないので、教科書に出てくる文学作品の登場人物のプロフィールを、生徒に書かせます。そうすると、その文学作品も読み込まないと書けないし、履歴書の書き方も覚えらる。

このような実技的な授業運営の在り方については、研究者や教師が集まって運営している教育研究団体「授業づくりネットワーク」（上條晴夫代表。http://www.jugyo.jp/）で、情報交換しながら進めています。

もう一つ考えていることは「集団で学ぶことをどうやって生かすか」ということです。

いま学校が学校であることの意味を考えたときに、小西正雄鳴門教育大学教授の『消える授業 残る授業』（明治図書出版）は、とても刺激的な本です。そこでは、学校で学ぶことの意義として、「集団で学べる」「継続して学べる」の2点を取り上げています。それに私は、更に「先生が失敗することから学べる」ということを加えて考えています。この三つは、家にいて1人でコンピュータをいじっているだけでは学ぶことが難しい。学校に来て集団の中で生活するからこそ学べることだと考えています。

先程の「学習ゲーム」「ワークシート」も、集団だから実現できる方法です。

Q 研究機関や専門研究者に望むことはありませんか？

教育現場で抱えている実践的な課題について研究している機関は、なかなか少なく発表も少ない。目にする研究のほとんどは、理論の体系化でとどまっています。

だからと言って、論文や研究報告が不要ということではありません。それはそれで、勉強になる部分はあるのですが、本当に必要なのは「理論の具体化」です。私は「理論の具体化」として、二つの方法を考えています。

一つは、理論を「教材化する」ということです。私が大学院に行ったときも、ただ研究するだけでは意味がないと思ったので、最終的に研究したものを教材化することを目指しました。研究している側から、その研究を実践するための具体的な提案として、教材を示してほしいのです。

もう一つ、「理論の具体化」という点で、私が大学院に行っていたときから考え、望んでいることがあります。

東京学芸大学は、教師を養成する大学機関です。大学院には、校長になるための「学校経営」の講座はありますが、「担任論」「担任学」というものはないんですね。校長にならない教師はたくさんいますが、担任にならない教師はほとんどいません。教員を養成する大学なのに、担任になってクラスをどう運営していくかについての具体的な方法論や、担任という職務について学ぶ場を提供していないのです。

果たして「担任学」という学問が成立するかどうかは分かりません。しかし、教師が担任を受け持ち、「家庭訪問はどう



いけだ おさむ

東京都杉並区立和田中学校教諭。
國學院大学文学部卒、八王子市立榎原中学校
などを経て、2005年4月から現職。国語担当。
2003年、大学院設置基準四条特例に合格し、
東京学芸大学で国語教育について研究。
教育研究団体「授業づくりネットワーク」にも
携わり授業運営について積極的に活動、自らの授業では
ディベートを導入するなど独自の授業運営を進めている。

する」「修学旅行はどうする」などの具体的な問題で大きな壁におつかる若い教師はとても多いのです。もちろん体験しながら教わることや、先輩教員から教わることは当然です。しかし、せめて教員養成を目的とする大学では、個別の臨床的領域ではなく、統括して具体的な方法論を学ぶことができる場があるべきだと思います。